

振って、振られて

くるみざわしん

登場人物

林典子

憲法学教授

山中法子

典子の助手

椿正

憲法学教授

秋。

夕の六時過ぎ。

日はとつくに沈んでいる。

空は曇り、月も星もない。

街に残る学問の森。

N大学法学部木造校舎の地下。

林研究室の書庫。

典子は本棚の本を選び、抜き出して、ダンボール箱に詰め  
ている。

床には本を詰め終えたダンボール箱が積み重なり、その脇  
に典子のバッグが無造作に置かれている。

ドアがあり、法子がその前に立っている。

法子 もうこんなに。

典子 (本を詰めながら) 四時前に毎日の手塚さんから電話があ  
ってね。

法子 ええ。

典子 出口調査で。

法子 はい。

典子 結果間違いないって。

法子 そうですか。まだ投票終わってないのに。

典子 便利になるわね、何事も日々。

法子 改正ですか。

典子 え。

法子 あ。

典子 まあもうどうでもいいんだけど。

法子 あの。

典子 嫌なのよ、何度聞いてもどこが改正なのって思っちゃう。

三回目なんだから慣れたらいいかもしれないけど。見出しには「改  
正」って出さないって手塚さんは言ってたよ。せめてもの抵抗の  
つもりなんでしょうけど、反対なら反対ではっきり「改悪」って

見出しに書けての。「憲法変わる」なんて中途半端な見出しつけて、何にも言っていないのと同じ。思うつぽよ。断った、コメントなんかする気にならない。

法子 手塚さんは。

典子 イヤね新聞記者って。飲みにゆくんだって。お祭り気分。どういう神経しているのかしら。結局、オリンピックと一緒なの。浮かれて騒いで売り上げが伸びればそれでいい。戦争が起きても盛り上がるのよ。大手に勤めている人は特にそう。

法子 こっちに来るって言ってました。飲みにゆくのをやめて。

典子 誰が。

法子 手塚さん。

典子 …。

法子 先生の携帯、電源切れててつながらないからって僕に電話が。

典子 切ったのよ、電源。かかってくると嫌でしょ。こんな時に。

法子 手塚さん、気持ち変わったんじゃないですか。

典子 だったら見出しを変えなさいっていうの。

法子 でも手塚さんもいろいろ。

典子 いろいろ何よ。会いに来なくていい。話すことなんかない。

法子 お手伝いしたいって。

典子 え。

法子 すみません。お伝えしました。先生のご予定。手塚さんならかまわないと思って。

典子 …。

法子 すみません。

典子 いいわよ。こういう時は手があつた方がいいから。男の人がいると助かるわ。外で待っててって言つといて。

法子 はい。

典子 終わっても飲みには行かない。

法子 わかっています。

典子 (唐突に) 日本国憲法第九十七条。

法子 (そらんじて) この憲法が日本国民に保障する基本的人権は、人類の多年にわたる自由獲得の努力の成果であつて、これらの権利は、過去幾多の試練に堪へ、現在及び将来の国民に対し、侵すことのできない永久の権利として信託されたものである。

典子 今回の「改正」でどうなった。

法子 削除です。

典子 すぐに出るんだから。こんな国。

法子、ドアを開けて外に出ようとする。

典子 どこに行くの。

法子 ちよつと上に。

典子 電話すればいいでしょ。手塚さんならここから。

法子 いえ、それだけじゃなくて、ちよつと。

法子、出てゆく。

ドアが閉まる。

典子は本棚に向かい、本を選ぶ。

ドアが開く。

典子は法子だと思って話しかけた。

典子 だいたいマスコミは権力を監視し、横暴を許さない。時には全面对決するぐらいの。

開いたドアから顔を出しているのは椿だった。

典子 あ。

椿 お引越し。

典子 いえ、あの、ちよつと、古い本の整理を。

椿 それはそれは。古いのたまつちやつてますもんね。ちやつちやつと捨てて新しいのを入れないと。

典子 …。

椿 スペース、限られているわけですから。先生の研究室も。

典子 あの。

椿 この夜ですものね。明日の朝には我が国の法の世界も大きく変わります。準備が早いのはよろしいことで。

典子 別にそういう準備じゃ。

椿 なになに。では。また。

椿、ドアを閉めて、去る。

典子、胸をなでおろす。

ドアが開く。

典子、飛び上らんばかりに驚く。

典子 わっ。

法子が立っている。

両手にダンボール箱を抱えて。

法子 あのと。  
典子 ドアを閉めて。

法子、背中でドアを閉める。

典子 樁が来たのよ。

法子 え。

典子 樁が、今。

法子 樁教授ですか。

典子 見なかった。

法子 見ませんでした。

典子 あいつ、あんなしやべり方なのにすばしっこいのよね。足音は立てないし。会議で資料のページをめくる時も、あいつがめくると音がしないの。

法子 何か言ってきましたか。

典子 何も。見たかったんでしょ。私がどんな顔しているのか。

法子 あんな人がどうして憲法学の教授でいられるのか。疑問です。

典子 これもご時勢よ。だめ、もう、うちの大学。

法子、抱えていたダンボールを置いてあったダンボールの上に置き、

法子 荷物になりますけど。

典子、法子の置いたダンボールのフタを開け、中を見て、

典子 これ。

法子 向こうで使ってください。原著が本であったほうがなにかと。

典子 いいの。高いのに。

法子 私はまた手に入りますから。

典子 そうなのよ。あつちは郵便がちゃんと届かないみたい。インターネットはあるんだけど、ブロックされてるって、どういうことなんだろう、よくわかんないんだけど、とにかく不便なんだけ。プリンターもいいのがない、紙もないっていうから、USBで持って行って、向こうでパソコンで読もうと思ってただけで、液晶は目がね、疲れるし。

典子、ダンボールのなかの資料に目を止め、

典子 これ。

法子 三年前の第一回の改憲から今回の三回目の改憲までの経過を僕なりにまとめて考察したものです。

典子 論文にするんじゃないの。

法子 発表の場はもう。

典子 そうね。

法子、言葉を返せない。

短い沈黙の後。

法子 2011年の311(さんいちいち)から一回目の憲法改悪、自衛隊の九条への明記と緊急事態条項の追加までの国内状況の分析、その後の二回目の改憲での九条第二項の変更までの国内状況の分析、今回の第三回第十條から四十條までの基本的人権条項の大幅改悪までの変化を国民がなぜ受け入れたかの私なりの考察です。生活の不安や挫折からは自主的、合理的行動は生まれず、むしろ自己放棄による権力への盲目的な追従が生まれる。すでに言い古された事実の論証に過ぎませんが、出来るだけデータを集めました。自由と人権を大切にしていた憲法を国民自身が捨て去った事例はそうありませんから、その点において学問的価値はあると思いますが、表現の自由は制限されてしまった。発表の機会はない。どうぞお持ちください。

典子 でも。

法子 四回目の改憲で政府は天皇元首制に踏み込んできます。その資料も入れておきました。あちらの国では役に立たないかもしれませんが。

典子 そんなことないわよ。むしろの国でも憲法を作り直す動きがあるみたいで。どう直すのか知らないんだけど、とにかくそれで私に声が。

法子は考え込んでしまっている。

典子 ありがとう。すぐに読む。飛行機の中で。

法子 次の国民投票、どう関わるべきでしょうか。

典子 え。

法子 次は僕が街頭に出て。

典子 そうね。誰かがしないと。

法子 わかっています。(口ごもる)

典子 私みたいになるのが怖い。

法子 え。

典子 …。

法子 先生に御相談することではないとわかっています。考えて自分で決める事なのですが。

典子 …。(言葉がない)

法子 大学でも日の丸を掲げ、卒業式、入学式で君が代を歌うのが当たり前。天皇元首制に反対するとなるとここでもかなりの圧力が。

典子 私は身の危険を感じるよ。

法子 わかります。だから先生は。

典子 ごめんなさい。

法子 いえ。わかります。先生はあちらへ。そして僕は。

法子、言葉が続かない。典子も紡ぐ言葉を思いつけない。

典子 呼ばれてるからいくわけじゃないわよ。早くしないとって思ってたね。今回の改悪でも二十二条、「外国移住および国籍離脱の自由」は残ったから。

法子 はい。

典子 ごめん。わかってるわよ、誰にでも簡単にできることじゃないって。

法子 いえ、いいんです。僕は残ります。やっぱり司法試験を。

典子 そう。

法子 弁護士資格がないと戦えません。受かるまではここで辛抱します。助手室も雲行きがあやしい。この先どうなるか。

典子 …。

法子 林先生がいらっしやらなくなれば椿が大手を振って。

典子 …。

法子 いえ、いいんです。

法子は言葉が続かない。典子も黙り、重い沈黙が訪れそうになった時、ドアが開く。

椿が顔を出す。

手に紙袋を下げている。

椿 あれれ、増えましたね。お二人に。

典子 え。

椿 たいへんですものね。古いものを捨てる。林先生お一人では。

典子 いえあの。

椿 優秀な若い方がいらして、心強い。

典子 …。

椿 ひとりよりふたり。ふたりよりさんにな。

典子 え。

椿 いえいえ、それでも大丈夫ですよ。

法子 椿先生。私、山中と申します、林研の。

椿 はい。山中法子助手。御専門は憲法。なかでも比較政治憲法学という新しい分野でシャープな論文を次々に発表していらつしやるホープですな、林研の。

法子 いえ、そんな。

椿 御謙遜は結構。どうぞ、これを。

椿は紙袋から日の丸の旗を取り出して法子に差し出す。

法子 え。

椿 どうぞ。

法子 あの。

椿 どうぞ。

法子 あの、これは。

椿 国旗です。お使いください。

法子 …。(手が出ず、受け取れない)

椿 どうしました。

法子 あの、使うって、何に。

椿 飾ったり、持って歩いたり、眺めたり、いろいろ。

法子 いろいろ。

椿 特に明日の朝、これを振って御出勤なさればまさにばっちりタイミング。

法子 私、それをそういうふうに使う趣味は。

椿 趣味ではなく。義務として。

法子 ぎむ。

椿 はい。国民の。

法子 …。

椿 このおめでたい日の朝に。

椿、日の丸をさらに前に差し出し、

椿 どうぞ。

法子、受け取らない。

椿 どうぞ。

椿、さらに日の丸を差し出す。  
法子、しぶしぶ受け取る。

法子 どうも。

椿、満足げにうなづき、

椿 では林先生にも。

椿、紙袋からもう一本取り出そうとする。  
法子、慌てて。

法子 あの。

典子 結構です。

椿 (手を止め) おや、どうして。

典子 どうしてって。

椿 国旗ですよ。この国の。

典子 結構です。どうしてそんなものこの私が。

法子は慌てて取り成し。

法子 椿先生はどうしてそれを。  
椿 え。

法子 過ぎているでしょう、勤務時間。お帰りにならないんですか。

椿 わたくしはボランティアで。

法子 ボランティア。  
椿 善は急げと申しますでしょ。何でも早い方がいいに決まっている。ところがわたくし、やることなすこといつもことごとく遅く、善とわかっていても急ぐことができない。それで、とにかく良いことは積極的にところがけてきました。ところが、正直に申します。実は一回目の改正の時にお配りしようと準備はしていたのですが、まだ早いかなとついつい弱気になってしまいました。次の第二回の改正、日の丸が正式に憲法で国旗と定められた時にお配りするのが本来ならばベストだったのですが、この時もわたくしこときが出すぎたまねをしたらいけないとついつい自粛、臆病風に吹かれてしまい、恥ずかしながらようやく今回の三回目までこうしてここに、

典子 手ぐすね引いていらしたわけだ、今度今度と。



椿 いえいえそんな。わたくし、全く気の弱い人間でして。  
典子 よく言うよ。  
椿 では林先生にも。

椿、日の丸を取り出そうとする。

典子 いらないわよ。

椿 いえいえ。そうおっしゃらずに。

椿、日の丸を取り出して典子に差し出す。

椿 どうぞ。

典子 いりません。

椿 どうぞ。

典子 結構です。持って帰って。

椿 様々お考えの違いはあっても、国旗は国旗、憲法は憲法。

典子 そうでしょうか。

椿 もちろん。憲法は国の根本。来年度は今年度以上に大規模な  
カルキュラムの変更を行い学生たちにも、

典子 教えるんですか、あれを。

椿 あれ、とは。

典子 今日決まったあれ。

椿 教えますよ。わたくしの専門は憲法です。

典子 あんなもの憲法と名前についているだけで中身は。

椿 正式な改正手続きをへて、国民が自ら選んだ憲法ですよ。私  
たち憲法学者が憲法が、これは憲法だ、あれは憲法じゃないなん  
て勝手に決めたらいけません。

典子 それでは、なんのための学問ですか。憲法というのは国家  
を、

椿 (遮って) 制限し、個人を守るためにある。

典子 …。

椿 存じ上げていますよ、わたくし、そういうお考えも。

典子 特定個人の考えじゃありません。国家の横暴に苦しんだた  
くさんの人たちの経験から生まれた。

椿 お考えですよね。

典子 真理です。

椿 ほう、真理。

典子 ええ。

椿 信念のほうが良くないですか、あるいは理念、理想。つきつ  
めれば人の思い、考えに過ぎない。今日の改正がその証拠。憲法

が守る基本的人権はなくなりました。すべて国家の制限がかかる。お国を差し置いて出しゃばるなんて日本人には不向きでしょ。

典子 向き不向きじゃなくて。

椿 いららないですよ、人権なんて。みんなが権利を主張し、国はめっちゃめっちゃ。

典子 国はめっちゃめっちゃにしたのは今の政府ですよ。

椿 あらら、林先生はわたくしと全く正反対。

典子 当然です。

椿 国を思う気持ちは同じなのに。

典子 …。

椿 ねえ。

典子 私は国じゃない。人を思っているんです。

椿 一緒でしょ。人があつての国。国があつての人。

典子 人があつての人。それだけです。

椿 おやおや、極論ですね。国はいらないと。

典子 人が先です。大日本帝国の成立まで今の沖縄、北海道は別の国だったんですよ。侵略の結果できあがったのが今の日本。誕生の瞬間から、人を踏みにじらないでは存在し得ないのが国家なんです。

椿 そんなに悪くお考えにならなくても。

典子 これは真理ですよ。

椿 …。

典子 その真理から導き出されるのが、国家に制限をかけ、個人を守る憲法です。

椿 うーん。困りました。

典子 困るんです。国家は。

椿 いえいえ。困るのは林先生。子供みたい、お父さん、お母さんに反抗する。

典子 え。

椿 フェイスブックでもツイッターでも言い立てられちゃってますよ。親不孝な娘だと。

典子 親に反抗なんかしてませんよ。私は憲法学者として言うべきことを言ってるだけで。

椿 ですよね。基本的人権なんてめんどくさい、もういらなくて人ばかりのこの国で、国より人が大切って主張している林先生が国からも人からも見離されているのを見るのが、わたくし、辛くて。

典子 …。

椿 人間なんてあてになりませんよ。守るべきは国家。守ってくれるもの国家。人間に期待しちやいけません。林先生。それが歴

史の教訓ではありませんか。

典子 …。

椿 ねえ。

典子 国連憲章と日本国憲法。第二次世界大戦を経て、平和への希求を高く掲げる点でこの二つの規範は共通しています。しかし、国連憲章が「武力による正義」を、日本国憲法が「正義のための戦争はありえない」を主張し、両者は全くの正反対です。なぜなのか。国連憲章の成立は1945年6月26日。日本国憲法の成立は1946年11月3日。この間に、1945年8月6日のヒロシマと8月9日のナガサキがある。国連憲章が「武力による正義」を主張し、日本国憲法が「正義のための戦争はありえない」と主張するのは二発の原爆の投下が人間を変え、進歩を産み、法律の世界をも変えたからです。

椿 落ちたんですか、ホントに、原子爆弾。

典子 え。

椿 我々はヒロシマとナガサキをもう忘れちゃっている。この国が今、どういう状況かご存知ですか。領土領海問題で中国、韓国、ロシアとの争いは続き、北朝鮮の核装備は増強一直線。中国も軍備を着々と増強、南の海は実支配されてしまいました。ところが、国家財政は借金まみれで、経済は停滞。七十年も八十年も昔のヒロシマだのナガサキだの言ってる状況じゃない。現状に合わせて変わるのが、あるべき憲法の形です。ひとつにならなくっちゃ。

典子 ひとつ。

椿 でないと死んでしまいます。みんなでひとつの日本でしょ。

典子 その発想で明治に国を作り、破滅したわけでしょう。天皇制で自由を奪い、侵略戦争に突き進んだ。

椿 そこは、そういう西洋的な発想を持ち込んだのが、失敗だったのです、明治の。個人とか権利とか憲法とかめんどくさい。日本は日本。和をもって貴しとなす。聖徳太子のこの一文で十分。

典子 はあ。

椿 御存じでしょ。和をもって貴しとなす。

典子 そんな条文ひとつで、現代社会を律してゆけるわけが。

椿 いえいえ、要はこころ。空気を読むっていう素晴らしい習慣がこの国にはあるじゃないですか。

典子 空気に任せたら危険です。空気に流されて、結局は権力のいいように。

椿 でも実際に空気で決まっているわけですから。和をもって貴しとなす。議論はやめましょう。山中さんも退屈でしょ。こんな話。

法子 …。(返答に困る)

椿 わたくし、日本はすばらしい国だと思うんです。世界の中心にあつていい。

法子 中心になくていいと思いますよ。隅っこで。

椿 隅っこじゃダメだ。長い伝統を持った日本こそ世界の真ん中に。

法子 僕はそう思いません。

椿 なに。

典子 私も。

椿 …。

椿 なに。

法子 いけませんか。

椿 まあねえ、お二人のようなお考えもあつていいお考えだと思いますよ。思いはしますが、ね、ま、結論は今日の結果です。ね、ですから、どうぞこれを。新しい憲法の時代に。

椿、日の丸を典子に差し出す。

典子、受け取らない。

椿 今年の卒業式ではようやくうちもこれを揚げて、君が代を歌いますよ。学長以下全員が起立。声を出しての斉唱。

典子 …。

椿 先生も一緒に、ね。

典子 聞いていませんよ、私、そんな話。

椿 あれれ、御存じありませんでしたか。教授会のメーリングリストでまわっていますけれど。

典子 来てません。

椿 あれえ、やっぱりですか。

典子 …。

椿 いえ、だから、そう思ってお持ちしたんですよ。どうか、ほら、ね。

椿、日の丸を典子の前に差し出す。

典子は受け取らない。

椿 乗り遅れると大変なことになりますよ。

典子 …。

椿 林先生はすでに仲間外れにされていらつしやる。わたくし、大嫌いなんです、こういうのが。ひとりの落ちこぼれも作りたくない。みんなでひとつ。さあ、これを持って。御一緒に。

椿、さらに日の丸を典子に近づける。  
典子は受け取らない。

法子 私がお預かりしますよ。

法子、手を伸ばし、椿が差し出している日の丸を取ろうとする。

椿、すばやく日の丸を引つ込め、法子の手は空を切る。

椿 先ほど一本お渡ししたでしょう。

法子 え。

椿 どうしてあなたがふたつ持つんです。

法子 …。

椿 欲張ってはいけません。これは林先生の。

法子 いえ、あの、あのですね。私がお預かりし、椿先生がこの部屋を出られた後、私から林先生にお渡しを。

椿 (遮って) なぜ。

法子 え。

椿 私も忙しいのでそうしたいだけだと助かるのですが。なぜそんなことを。

法子 ええと、それは。

椿 御協力を申し出て下さっているのですか。ボランティアで。

法子 …。

椿 そう判断してよろしいですか。私に代わって林先生を説得し、この国旗を林先生の手に渡して下さいと。

法子 はい。

椿 お金はできません。ボランティアですよ。

法子 もちろん。

椿 では、お願いします。わたくしは法学部の全研究室を今晩中にまわり、さらに文学部、経済学部、教育学部をまわらなくてはなりません。

法子 え。

椿 明日は理学部、工学部、農学部、医学部、薬学部を朝のうちに。

法子 …。

椿 手伝っていただけますか、そちらも。

法子 え。

椿 この袋ひとつ分。

法子 いえ、あの、僕は。明日は朝から講義ですし、林先生の説

得にもかなりの時間を要すると思われれますから。

椿 確かに、そうですね。

法子 ええ。

椿 ご苦労様です。

法子 いえ。あの。

椿 ではここをよろしく。

法子 はい。

椿 これを。

椿、日の丸を法子に差し出す。

法子、受け取る。

椿 無駄な争いはくれぐれも避けてください。和をもって貴し。

法子 …。

椿 よろしいですか。

法子 はい。

椿 山中法子助手。ファイトです。

法子 はい。

椿、一礼して退出する。

典子 なんなのあいつ。

法子 あの人はあの人で本気なんです。僕、なんだかとても悪いことをしたような気がして。

典子 え。

法子 ああいう人を見るとやっぱりこれ（日の丸）しかないのになって。

典子 馬鹿なこと言わない。

法子 馬鹿なことだっただってのはわかっています。ところが、その馬鹿なことがまた目前に迫っている。戦前なんてもんじゃない、もっと悪い。ヒロシマ、ナガサキの原爆投下よりもっと悪いところへ行こうとしているかもしれない。なのにそれを仕方のないこととあきらめている。

典子 …。

法子 先生もここを離れて外国へ。

典子 …。

法子 どうなるんでしょうか、僕は。

法子 先生。

典子、法子の手から日の丸を一本取る。

典子 こんなもの。

典子、旗を引き裂こうとする。

法子 先生。

典子 作りなおさなくちゃいけなかったのよ、もっともつと根元から、国を。

と引き裂こうとする。が、破れない。

典子 あれ。

典子は持ち直して破ろうとするが、

典子 なにこれ。

と破ろうとするが、どうやっても破れない。

ドアが開き、椿が顔を出す。手には先ほどの紙袋。

椿 なにしてるんです。

典子 あ。

典子、破ろうとしたのをごまかし、慌てて日の丸を持ち直す。

椿 嫌な予感にして、戻ってきたのですが。

典子 あら、嫌な予感でなにかしら、ここには、なにも。

椿 破ろうとしていませんでしたか、今。

典子 何を。

椿 それ。

典子 とんでもない。ちょっと。あれですよ、気になって、しわ

が

典子 振る時にみつともないでしょ。

椿 しわがありましたか。

典子 あったわよ。伸ばさないと、しわは。

典子、ありもしない旗のしわを伸ばす。

椿 もうしわけございません。

典子 いいのいいの、気にしないで。

椿 しかし。

典子 いいのよ、しわぐらい。

椿 振ってみようとなさったんですね、林先生。

典子 え。

椿 しわが気になったということは。

典子 ええ、まあ。

椿 素晴らしい。林先生に振っていただけたら、わたくしも頑張  
って配ったかいがありました。国旗日の丸もきつと喜んでいます。

典子 そんなことないと思うけど。

椿 振ってみていただけませんか。

典子 え。

椿 今、ここで。

典子 …。

椿 さあ。

典子 いえ、私、振れませんかから上手に。

椿 いいんですよ。上手でなくても。最初から上手な人なんてい  
ません。

典子 いえ、そんな、椿先生の前ではとても。

椿 かまいせん。わたくしなど気になさらないで。さあ。

典子 いえ。

椿 さあ。

典子 いえ。

典子は旗を振ろうとしない。

椿 ではわたくしがお手本を。

典子 え。

椿 よく見ててください。まず、人が旗を振るのを見る。それが  
上達のコツです。

椿は紙袋から日の丸の旗を一本取出し、

椿 こうですよ。林先生。

椿、振る。

椿 簡単でしょ。こう持って、こうです。



椿、振る。

椿 ね。

典子 ええ（うなずいて）。

椿 では、曲に合わせて。林先生も一緒に。白地に赤く、日の丸揚げてー。

椿、振る。典子は振らない。

椿 難しいですか。では、曲なしで、カウントでいきましょう。ホラ、いち、に、さん、し。いち、に、さん、し。ホラ、いち、に、さん、し。

典子は振らない。

椿 うーん。そうだ、やっぱり歌いながら。歌えばね、自然に手が。ほら、林先生、歌って。いきますよ。白地に赤くー。

椿は歌いだそうとする。

法子 すみません、あの、椿先生。

椿 为什么呢。

法子 実はあの。

椿 なんです。

法子 いえ、あの、実はですね。椿先生は御存知ないと思います。椿が、林先生はお上手なんですよ、旗を振るのが。

椿 え。

法子 林先生は長野県の御出身で、長野県には「信濃の国」という県の歌があるんです。先生が小学生だった頃には「手旗踊り」と称して、両手に一本づつ日の丸を持ち、県の歌「信濃の国」を歌いながら踊るといって授業が体育にあつたんです。毎年の運動会では全校生徒が校庭に広がって縦横に並び、檀上の校長先生を前に日の丸を振って手旗踊りを見せるという種目が行われていました。林先生は優等生でしたからいつも先頭で。

椿 ほう。

法子 お上手なんです。旗を振るのは。

椿 ではその、「信濃の国」に合わせて、ぜひ。

法子 いや、そうはいきません。長野県でも運動会でしかない、特別な踊りです。

椿 そんなに貴重なものなんですか。

法子 はい。

椿 お上手なんですわね、林先生。

法子 それはもちろん。

椿 なるほど。さすがですわね林先生。能ある鷹は爪を隠す。小さい頃から優等生でいらした。

典子 ええ、まあ。

椿 信仰を隠していらしたんですね。この業界で生き延びるために。隠れキリシタンのように。

典子 え。

椿 そうとは知らず、失礼なことばかり申しまして。

典子 いえ、いえ。

椿 しかし林先生もお人が悪い。旗を振るのがお上手ならお上手っておっしゃってくださいれば、わたくしだって。

典子 でも、自慢するようなことじゃ。

椿 そうです。おっしゃる通り。自慢なんてとんでもない。なのにこの頃は、こんな当たり前のことを自慢する連中が増えてわたくしもこころ苦しく思っているんです。こういうことは、たしなみとして、内に秘めておくべきものですよ。

典子 はい。

椿 いやあ、うれしいなあ、林先生とこういうお話ができて。

典子 …。

椿 すごく通じ合えた気がします。

典子 ええ。

椿 え、林先生も。そうお感じになっていらつしやるんですね。うれしいなあ。

典子 …。

椿 そしたら、ほんのちよつと。一振りでかまいません。見せていただけませんか。小学生の頃から磨き上げられた先生の旗振りの技を。

典子 いえ。

椿 遠慮なさらないで、どうか、この椿に。一振りでもいいですから。

典子 …。

椿 お願いします。林先生。わたくし見たいんです。林先生の一振り。

椿は頭を下げ、動かない。典子がうんと言うまで上げないつもりである。典子は根負けし、

典子 一振りだけですよ。

椿 ありがとうございます。  
典子 じゃ。

典子、一振りする。

椿 おお。

典子 …。

椿 もう一回。

典子 え。

椿 もう一回お願いします。

椿、深々と頭を下げる。

典子、振る。

椿 おお。すばらしい。お願いします。もう一回。

典子、振る。

椿 おお、もう一回。

椿、深々と頭を下げる。

典子、振りかけて手を止める。

典子 もうこのぐらいで。

椿 ありがとうございます。林先生の貴重な一振り、この椿、しっかりと目に焼き付けました。

典子 いえ、そんな。忘れてくださいよ、すぐに。

椿 今からまわる研究室の方々に、わたくしのつたない言葉ではございますが、林先生の今のお姿をお伝えします。林先生の日の丸姿、すてきでしたよと。

典子 え、あの。それはちよつと。

椿 いえいえ、謙遜なさらないで。

典子 いえ、謙遜じゃなくて、

椿 過去に養ったものを表だつて言いにくかったという御事情が  
おありだったと思いますが、今はもうそれもなくなりました。こ  
れからは堂々と。自由に旗を振りましょう。

典子 …。

椿 旗を振りましょう、林先生。

典子 そういものかしら。

椿 そうですよ、これからは堂々と、自由に。

典子 …。

椿 どうされました。

典子 自由って何なのか、ちょっとわからなくなりました。

椿 え。

典子 自由って何なんでしょう。

椿 好きに旗が振れることですよ。どの旗を振ればいいのか気にしないでひとつの旗を。人は国でそうやって生きていく。

典子 旗を振らない自由はありますか。

椿 あると思いますが、それは自由ではなくて、不自由でしょうね。

典子 …。

椿 旗を振るって気持ちいい。快感だ。生きる喜び。

典子 …。

椿 すみません。わたくしごときが林先生に偉そうに。

典子 いえ、いいんです。

椿 それ(典子の手の日の丸)はどうぞ大切にお持ちください。

典子、持ったまま動けない。

椿 (法子に) ありがとうございます。山中さんにおまかせして良かった。林先生のあのようなお姿が見れて、わたくしは本当に。

法子 いえ、僕は何も。

椿 引き続き、御協力いただけませんかでしょうか。

法子 え。

椿 (手の紙袋を掲げ) 残りを今夜じゆうに。

法子 いえ、あの、まだ、このあと林先生と。

椿 旗振りですか。いいですねえ、この夜に。

法子 いえ、そうじゃなくて、新聞社の方とちよつと。

椿 ほう、新聞社の方と。

法子 別にたいしたことじゃありません。こういう日のいつもの「ハイ」。

椿 なるほどなるほど。この夜ですものね。

法子 ええ。

椿 実はね。山中さん。法務省から要請がありまして、まだ内密なんです。来月、新しい委員会が作られます。憲法の次の改正に備えての準備委員会。座長はこのわたくしにお声がかかりまして、今、人を選んでいるところなんです。できれば若い方に入っていたきたい。実力のある、若い、女性に。

法子 …。

椿 山中さん、いかがでしょう。

法子 いえ、それは。

椿 林先生も旗を振ることに決められたようですし。

典子・法子 え。

椿 そうでしょう。林先生。

典子 ええ、まあ、振りましたけど。

椿 それもこれも山中さんの御尽力のたまもの。

法子 …。

椿 すばらしかったですよねえ。林先生の晴れ姿。

法子 ええ。

椿 お手柄ですよ、山中さん。林先生が頑ななところを解いて、日の丸を振り、わたくしたちに歩み寄ってくださった。

法子 …。

椿 素晴らしい成果です。正直言って、わたくし憲法学者でありながら、憲法が変わったぐらいで何が変わる、なんにも変わらないうって思っております。しかし、変わりますね、林先生のお姿を見てわかりました。それもこれも山中さんのおかげ。わたくしは全国民を代表して山中さんにお礼を申し上げたい。ありがとうございます。

法子 あの。すみません。

椿 为什么呢。

法子 せっかくのお話ですけれども、委員会のお話はなかったことに。

椿 いえいえ、そんな。

法子 役不足です。僕では。

椿 役不足なんてとんでもない。もうお手柄は十分。

法子 まだ勉強中で、論文も書かなくてはなりませんし。

椿 そんなの委員会しながらいくらでも書けますよ。官僚に下書きさせて赤ペン入れりやすむ話です。こういつちやなんです、委員会に入ったほうが業績がありますよ。全国区で顔が広がって、認められるのも早い。

法子 …。

椿 お嫌いですか、そういうの。

法子 はい。僕はちよっと。

椿 ですよ。でも、そのお考えなんかも、こだわらないで、どんどん変えちゃってくださいとかまいません。わたくし全然気にしません。いつでも大歓迎。これからは法律がぐるぐる変わりますから、似たような委員会はたくさんできます。わたくしだって座長の二つ三つは兼任して、理事も顧問もじゃんじゃん引き受けてゆきますから、いつでもお声かけ下さい。お世話しますよ。いつでもどこへへでも。

法子 …。

椿 まあ、今夜の林先生の御様子を拝見して、山中さんがこの先ご苦労なさることもなさそうだとわたくし安心しました。心配していたんですよ。林研究室はどうなってしまうんだろう。中山さんはどうするおつもりなんだろう。一人で孤立して、過激派みたいになってしまったらどうしよう。うちの大学はそういう人に冷たいしって、いらぬ心配をしておりました。

法子 …。

椿 先ほどの委員会の件、前向きにご検討ください。悪いようにはしません。山中さん。われわれはひとつ。ファイトです。

法子 …。

椿 すみません。おしゃべりが過ぎました。次へ行かないといけないのに。つつい。それで、あの。新聞社の方には先ほどの準備委員会の件、お話していただいちゃってかまいません。正式発表の前に漏れてくれた方が都合のよろしい面もあります。反応を見ながら、軌道修正ができますから。

法子 …。

椿 もちろん黙っていただいても全然かまいません。中山さんにお声がかかっていることなんか、御自身からはおっしゃりにくいでしょうから。

法子 …。

椿 わたくしがバラしちゃったりして。

法子 …。

椿 あははははは(笑う)。では、また。

椿、去る。

典子は持っていた日の丸を床に投げる。

典子 なんなのよ、いったい。

法子 すみません。

典子 私、長野県の生まれじゃないんだけど。

法子 僕の体験です、小学校の時の。とっさにどう言ったらいいかわからなくなってしまうって。

典子 とんでもない土地の生まれなのね、あなた。

法子 すみません。

典子 でも、どうして。

法子 え。

典子 どうして拒否できなかったんだろ、私。

法子 先生。

典子 あなたがしゃべり出した時、わかったのよ。私に旗を振ら

せまいとしてくれているんだって。これでうまく切り抜けられるかもしれないって思った。作り話で椿を言いくるめてね。ところがあいつは下手に出て、頭を下げた、私に。林先生、お願いしますって、深々と、その下った頭が私の目の前にきた時、振ってもいいかって思っちゃったのよ。一振りだけならいいかって。なんだか愉快的な気持ちになって。椿への軽蔑と憐みが入り混じった、変な気持。まあいいやっていう緩み。あきらめ。それでいてちょっと得意になっているみたい。妙な気分。とにかくそれで楽になったのよ。今夜の嫌な気分をあの一瞬間忘れた。信じられないでしょ。あんなにむかむかしていたのに。ふっとなくなってしまう。笑わなかった、あの時、あなたも。

法子 笑ったかもしれません。

典子 私もたぶん笑った。椿に操られているだけだったのに、椿を操っているような気持ちになって。上に立っているような気がしたのよ。とんでもない間違いだけど、気分が良かった。私がそんなだったのよ。見てたでしょ。あの時、私、そんなだったのよ。

法子 …。

典子 わからないものね、私なんて。

法子 先生。

典子、床の日の丸を拾う。

典子 持っていこうかな。

法子 え。

典子 今日のことを忘れないために。

典子、棒を回し、旗を巻きつけながら、

典子 私はここから始めないと。

法子 先生。

典子 うぬぼれていたのよ。憲法学の教授だからって憲法を産みだす力を手に入れたわけじゃない。それだけのことよ。

典子、巻きつけた日の丸をバッグにしまい、

典子 よく考えてみる。今日のこと。

法子 …。

典子 (法子がずっと手に持っている日の丸を指し) それ、どうするの。

法子 僕は怖いんです、この旗を持ってしまうことが。

典子 …。

法子 準備委員会の話。助手のなかに寝返る奴が必ず出ます。仲間が減って、孤立したら僕はどうなるのか。椿はそれを見越して誘いをかけてきた。むこうに早く行くほうが楽に決まっている。ここにとどまっても僕なんか簡単にひねり潰されてしまう。いや、潰されたら潰されたでいいんですよ。怖いのは、潰されまいとしているうちに僕が椿のようなになってしまうこと。僕は小学生の時、何にも考えずに旗を振っていた。あの頃に戻って。簡単にころころつと転がって。何も考えないほうが楽だと

典子 …。

法子 椿だって助手の頃はあんなじゃなかったんですよ。

典子 そう。貧乏で苦学生だった。「人気がないから法学部に入りました。教授になりやすいですから、人が少なくて」って挨拶してみんなを笑わせた。

法子、手の旗を見て。

法子 僕らどうなるんでしょう。

法子、旗を手で広げてみる。

典子 破るの。

法子 いえ。でも。こんなものって思うんです。こんなものなくてもやってゆけるのに。運動会だってやれたんですよ、こんなのも振らなくても。

法子、広げた旗を見る。

と、旗がスルスルとひとりでに裂けて二つになる。

法子・典子 え。

法子の右手と左手に裂けた日の丸の切れ端が一枚づつ垂れ下がる。

法子 どうして。

法子、左手の裂けた日の丸を持ったまま、右手の裂けた日の丸の端を左手で持ち、広げてみる。  
また裂けてふたつになる。



法子 なんにもしてないのに。勝手に。

法子、手にある裂けた日の丸を見る。  
典子も見ている。

典子 念力。

法子 まさか。

ドアが開き、椿が顔を出す。手にあの紙袋。

椿 どうされました。

法子 いえ、あの。

法子も典子も動揺していて、裂けた日の丸を隠さなくては  
思うが何もできない。

椿 今夜はおかしな夜でしてね。また悪い予感が。(法子の手の日  
の丸を見て) あ。

法子 あ、これは。

法子 勝手に裂けたんです。なんにもしてないのに。

椿 なんにもしてないのに。

法子 そうです、持っただけで二つに。

椿 四つに裂けてますけど。

法子 二つに裂けたのが、また二つに。持っただけで。

椿 へんですね。そんなことってありますか。

法子 嘘じゃありません。ホントです。僕は何も。

椿 してないんですよね。

法子 してません。

椿 日の丸を破ろうなんて気は。

法子 ありませんよ。そんなもの。

椿 そんなもの。

法子 はい。

椿 全然ないんですよ。そんなもの。

法子 ありませんよ。

椿 そんなもの。

法子 え(気づく)。

椿 そんなもの。ふっ(鼻で笑う)。

法子 …。

椿 それをお聞きして安心しました。ちょっとかしてください。

椿は法子の手から、裂けた日の丸を一枚手に取り、

椿 ほら。

椿、手の日の丸を広げてみせる。  
日の丸はふたつに裂ける。

法子 あ。

椿 こういう作りになっているんです。

法子・典子 …。

椿 なんて思っただけじゃないでしょう。

その通りだが法子も典子もうなづけない。

椿 ユーモアですよ。ユーモア。このぐらいのお笑いのセンスはわたくしにだってあるんです。あ、日の丸を破ったな、憲法違反だぞ。なんて言いがかりをつけて刑務所にぶち込むようなことはしませんよ。

法子・典子 …。

椿 やればできるんですけどね。アハハハハ。

法子も典子も笑わない。

椿 冗談ですよ、冗談。しません、そんな野暮なこと。だってもう憲法で国旗なんですから。破っても破っても国旗は国旗。

椿、紙袋から日の丸の旗を一本取出して、二つに裂いて見せる。

椿 ほら。ね。

椿、裂いた日の丸を床に捨てると、紙袋からもう一本取出して、二つに裂いて見せる。

椿 破っても破っても憲法は揺らがない。強いんです、法律は。ほら、もう一本。

椿、裂いた日の丸を床に捨てると、紙袋からもう一本取出して、二つに裂く。

椿 わかりますよ。お二人とも法律の専門家なんだから。  
典子・法子 …。

椿 破つても破つても、日の丸は国旗です。憲法になるつてのは  
こういうことなんですよ。

典子も法子も返す言葉がない。

椿 またまた釈迦に説法でしたね。失礼しました。

椿 手に持っていた日の丸を床に捨てると、紙袋から新しい  
日の丸を取り出して、

椿 これをお使い下さい。小細工なし。引っ張っても破れない。

椿 取り出した日の丸を引っ張る、破れない。それを法子  
に渡す。

法子、受け取る。

椿 山中さん。あなたに日の丸を破る気持ちがないと知って安心  
しました。

法子 え。

椿 実はひよつとしてと疑っていたんですが。いや、あなたが日  
の丸を破るわけありませんよね。先ほどのご様子でよくわかりま  
した。強く否定していらつしやいましたから。そんなものありま  
せんと。

法子 …。

椿 いつでもいらしてくださいね。私の部屋に。

椿 握手の手を差し出す。

法子は手を差し出さない。

椿、手を伸ばし、法子の手を握り、強引に握手。

椿 お待ちしています。

法子 …。

椿 では。

椿 握手を解き、去る。

ドアが閉まる。

法子は椿に握られた手を見る。

典子 あいつ。

法子 僕、「そんなもの」って言ってしまいました。侵略戦争のシンボル日の丸を反省なしに使い続けるこの国を良しとしない人たち。日の丸を見ると日本軍の残虐行為を思い出し身震いするとうアジアの人たち。そこに憲法学者としての根を張っているつもりだったのに。

典子 …。

法子 悲しみと怒り。国家に捨てられた多くの人たち。「そんなもの」なんて呼んでいいはずなのに。やっぱり僕は子供の頃からこの手（椿に握られた手）をどうしたら。

典子 考えるしかない。あなたはそれをここで。私は向こうで。

法子、日の丸を床に叩きつける。

典子 少し、休んだら。

法子 いえ。

法子は床に叩きつけた日の丸を拾い、旗を棒に巻きつけ、ポケットに。

法子 持っておきます。忘れないために。

典子は本棚の片づけを再開する。

床には裂けた日の丸が散らばっている。

法子は動けない。

椿が飛び込んでくる。ハアハアと息を切らして。

典子 なに。

椿 ああ、ちよつと、あの。（床に落ちている、ちぎれた日の丸を見て）ああ、これ、これ、これ。

椿、床にはいつくばり、ちぎれた日の丸を拾う。

法子 （椿に）何してるんです

椿は答えない。ちぎれた日の丸を探す。

法子 椿先生。

椿はつぶやぐ。

椿 何枚破ったんだっけ。覚えてないよな。俺としたことが調子に乗って。

法子 椿先生。

椿 うるせえ。

法子 …。

椿 (拾った日の丸を両手で抱え) これで全部か。

法子 え。

椿 (抱えていた日の丸を紙袋に入れながら) どっかに隠したりしてねえだろうな。

椿、部屋の隅に一枚落ちているのを見つけ。

椿 ああああああ。

椿、隅の一枚に飛びつく。

椿 危ない危ない。やっぱり隠してるな、貴様ら。

典子・法子 え。

椿 俺を陥れようとして、グルだろ。

法子 誰と。

椿 え。

法子 誰と、僕らがグルなんですか。

椿 憲法改正総本部、大日本会議の後藤だよ。

法子 後藤。(典子に尋ねて) 知ってます。

典子 知らない。

椿 しらばつくれんな。あ(気づいて)、ですよ。ご存じなわけではないですよ。お二人があの方を。

法子 なんなんですか。

椿 すみません。忘れて下さい。わたくしが口走ったことはどうか聞かなかったことに。

典子 憲法改正総本部。大日本会議。後藤さん。

椿 やめてください。

典子 落ち着いてよく探さないと。ここにほら、もう一枚。

典子、床から一枚拾って椿に。

椿、受け取り、

椿 ありがとうございます。実はわたくし、林先生の旗振りにすっかり心を奪われてしまい、誰かに話したくて話したくて、つい

電話してしまっただんです。

典子 その人に。

椿 そうです。そしたら、あの林が旗を振ったかって大喜び。

典子 呼び捨てなんだ、私。

椿 やっぱりあの、林先生は宿敵。でもだからこそ旗を振ったと知って大喜びされたんです。よくやった椿って、わたくしも呼び捨てなんですよ。でもとにかく褒めて下さって、調子に乗って、わたくしが細工して旗が破れた時に林先生と山中さんが口をあめぐりと開け目をまん丸くしてどんなにへんな顔だったかを面白おかしくお伝えしたんですよ。喜んで下さると思っただんですけど、電話口で一言もしゃべらなくなっちゃって、いやーな雰囲気。しようがないからわたくしが「どうかされました」って声かけると、「日の丸を破っただ」とってすごいんで、「んなことしていいと思ってるのか。バカ椿。死ぬ。非国民。ぶっ殺してやる。首洗って待ってるそこで」って電話が切れた。

典子 待ってるそこであってどういうこと。

法子 来るんですか。ここに。

椿 まさかまさか。その方は東京のと真ん中にいますから、部下をね、よこすんですよ。近くの支部の。

法子 部下。

椿 おわかりになりますでしょう。そういう方面の実戦的な方々。

法子・典子 …。(推測はついた)

椿 もちろん、日の丸を破ったのはわたくしですから、お二人に罪をなすりつけるようなことはしませんよ、たぶん。

典子 たぶん。

椿 はい。

典子 たぶんと言われてもねえ。

椿 いえ、しません。絶対にしませんから。わたくしが日の丸に細工したことも積極的に彼らに、いえ、彼女も混じっているかもしれないですけど、とにかく連中に言わないでお願いです。

典子 消極的にならないの。

椿 え。

典子 事実を事実として、そのまま。

椿 そこはその、口を濁して、記憶にないとかなんとかか。

法子 (紙袋を指し) それは。

椿 隠しますよ。誰かが、どこか遠く。安全なところへ持って行って下さると良いのですが。

法子 (典子に) 先生。

典子 いやよ。そんなの持って出るの。

椿 あ。どこかへ出かけるに予定が。

典子 え。

椿 いつ。

典子 …。

椿 いつですか。

典子 割と近いうちかな。

椿 今すぐでお願いします。

典子 え。

椿 今すぐ。

典子、日の丸を取り出し、椿に差し出す。

椿 あの、これは。

典子 ちゃんとしたの、一本でも多いほうがいいんじゃない。

椿 そうなんです。支部の経費で購入しておりまして、その点を突かれるとわたくしも。振るために振った旗を別の目的に使っていますから。こんなめでたい夜にかたいこと言わなくてもいいんですけれど。

法子、自分の旗を取り出し、

法子 これも。

椿 ありがとうございます。いったん受け取っていただいた日の丸をこんなふうに戻していただかなくてはいけないんで、せっかくお二人とわかり合えたこの夜が砕け散ってしまうようで辛い。

椿、まず法子の旗を、次に典子の旗を受けとる。

典子、手から日の丸がなくなり、

典子 ちよつと残念。持って飛行機に乗る気でしたのに。

椿 飛行機。

典子 あ、いえ。

椿 出るって、もしかして、海外。

典子 …。

椿 上で、新聞記者風の男が車の中で世界地図を広げて首つっこんで舐めるように見えていました。こんな夜にへんな奴だと思ったんですけれど、あれですか。

典子 …。

椿 第二十二条、外国移住および国籍離脱の自由を。

典子 ええ、まあ。

椿 連れて行って下さい。

典子 え。

椿 お問い合わせ。このままここにいたらわたくし。

椿、典子に深々と頭を下げる。

典子 …。(答えない)

椿 お問い合わせ。

椿、深々と頭を下げる。

典子 愉快的な気持ちになったのよね、さっきは。あなたの頭が下にあつて私が上に立ったような気がして、旗を振った。今夜のことを忘れて。いい気持ちになって。でも今は悲しい。あなたを助けたいと、私は思っていない。憎んでいる。死んでしまえばいいと思っっている。積極的に殺すわけじゃないけれど、手助けしないで消極的に殺す。この気持ち。こんなにはつきり意識したのは初めて。命を大切に思えない。銃があればここであなたを撃ち殺しても。

典子、腕を銃に見立てて椿の頭に狙いを定める。

椿 やめてください。

椿、典子の腕から逃げる。

典子 椿先生。人間てこういうものなのよ。組織にまぎれて、言い訳さえ見つけられれば、いくらでも残酷になれる。それを防ぐための人権、憲法、九条なんじゃないの。

典子、銃に見立てた腕で椿を狙うのをやめない。

椿 やめて下さい。もうわたくし、気が変に。

典子 連れて行かないわよ、それでいい。

椿 結構です。あなたとなんか一緒にいられない。

典子 そうね。

典子、腕を下ろす。

典子 二十二条は行使しない。

法子 え。



典子 ここに残る。

法子 …。

典子 (椿に) 自分でなんとかしなさいよ、椿先生。自分が撒いた種なんだから。

椿 人殺しめ。憲法学者が聞いてあきれろ。

典子 人のせいにならないで、自分の力で生き抜きなさい。

椿 わかってるよ。

椿、去る。

典子 あなた、行って。

法子 え。

典子 私の代わりに向こうの国へ。私は今夜のこと。憲法学者らしくない私から始めて、憲法を学び直す。ここで。

法子 先生。

典子 向こうで憲法学者のふりを続けるわけにはいかないもの。

法子 また街頭に立つんですか。

典子 そうね。自分の考えは発表しないと。

法子 そんなことしたら。

典子 わかっている。でもこれはとめてはいけない努力なの。そういう事情で私が行けないとあなたが伝えて。そして私の代わりに。

法子 僕では。

典子 やるの。できるできないじゃない。さ、行って。チケットは手塚さんに手配してくれる。

法子 …。

典子 行って。私は次の準備を始めるから、そこにいても邪魔なだけよ。

法子 先生。

典子は答えない。

本を探し、広げ、読み、メモを取り始める。

法子 先生。

典子は答えない。作業を続ける。

法子、一礼して去る。

典子、法子の去った先を見、振り返り、考えて。

典子 過去幾多の試練に堪へ。か。

典子、本に目を戻し、ページをめくる。  
溶暗。

終

参考文献

- 「日本国憲法」
- 「鶴見俊輔語録・この九十年」鶴見俊輔 皓星社
- 「天皇・マツカーサー会見」豊下櫛彦 岩波現代文庫
- 「原発事故はなぜくりかえすのか」高木仁三郎 岩波新書
- 「政治の世界」丸山真男 岩波文庫